父の最後の思い

竹園レイラ

私は七年間、原因不明の病でいわゆる〝ひきこもり〟だった。頭の中の思考回路が完全に遮断されて何も出来ないし、何も考えられない状態に陥ってしまった。これはきっと鬱病だと思い、いくつかの病院に通ったがどこの病院もただ薬を出すだけで一向によくならずそのうち薬の種類も増えていきすごい量になってしまったのでなんだか飲むのがいやになり病院にも行かなくなった。家にいても〝家事〟もほとんど出来ずただ一日をなんとか終わらせるという毎日を送っていた。食事は夫が朝、仕事に行く前に茹でたスパゲティに市販のソースをからめたものを朝昼、二回に分けて食べていた。テレビも目がすぐに疲れてしまうため観る気がしなかったが、コンサート、ライブ映像などは大丈夫だったのでロックやポップスなどの音楽映像を観たり聞いたりしていた。若かった頃よく聞いていた懐かしいものや今、流行っている若者に人気のあるバンドの音楽をよく聞いていた。音楽は私の心を開放してくれて、ゆったりと心地よい気分に浸ることができて、とても癒してくれた。

そんな頃、以前から心臓を患って入院していた私の父が危篤という知らせを受け、長い間外出をしていなかった私にとって苦痛であったが、どうにかこうにかして病院までたどり着いたのであった。酸素吸入器をつけた父は時々肩で大きく息をしていたが「お父さん、遅くなってごめんね」という私の問いかけには答えることはなかった。

父と最後に言葉を交わしたのは……あれは確か二年前の夏のある日、父は私の家にふいに訪れたのだ。心の病をかかえた娘が何も出来ない事を解っていた父は「水だけ一杯くれえ」と言い、少しの間たわいのない話をして母の愚痴を言い帰って行った。それが最後父とほんのつかの間のふれあいだった。昔から父は娘の私に対して素直に愛情表現などする人ではなかった。いや、したくてもそれは出来なかったのかもしれない。父は幼い頃に自分の父親を病気で亡くしていたので「父親」という存在がどのようなものかを知らずに大人になった。愛情表現を示すお手本がなかったので今思えばそれは仕方のない事だったのかもしれない。長男だった父は自分の母親や兄弟たちを養うために中学校も満足に行けず、一生懸命働いたと聞いた事がある。すごく働き者で真面目な父親であった。進学や就職、結婚する時でさえ〝特別な言葉〟をかけてもらった事はなかった。父が亡くなるまでの何十年間、会話らしい会話を親子なのにした事がなかったのである。しかし母に対しては私

父の最後の思い

が物心ついた時から実に横暴な態度で接していた。母は唯一自分がわがままを言える相手だったのだろう。

父は母と結婚した頃〝スタンドバー〟を自らシェーカーを振り経営していた。当時、米軍基地が近くにあった事から客のほとんどは米国人だった。私が幼稚園に通っている頃、ほとんど父とはすれ違いの毎日だった。私が眠る頃父は仕事のまっ最中であり、私が起きる頃父は深い眠りに着いていた。普段あまりかまってやれない娘を不憫に思ってか、朝起きると決まって枕元に何かしらのお菓子が置いてあった。ドロップやチョコレートなど、一つだけだったが私はうれしかったしそれがとても楽しみでもあった。それはその時まだ若かった父が娘にしてやれる唯一の愛情表現だったのかもしれない。

小学生になる頃には、きつい仕事で肝臓を悪くした父が一年あまりの療養生活を経て紳士服の販売の仕事に転職した。たぶんバブル絶頂期には商売が繁盛してだいぶ儲けたのだと思う。とても羽振りがよくて当時私も妹も私立小学校に通っていたし、大きな犬を数頭飼っていた。自分だけでハワイ旅行に行ってきたり、北海道に行った時にはおみやげに鮭を銜えた大きな木彫りのクマを買ってきた事もあった。時々家族を温泉などに連れて行ってくれた事はあったが……。

父の葬儀の時私の体調は最悪で、あまり回復せず身内だけで見送った。薄く死化粧を施された父の顔は、今まで見たことがないとても安らかなやさしい寝顔だった。まともな会話を娘と交わすことなく父は逝ってしまった。

父の死から三年くらい経った頃、父が死ぬ間際まで書き残したノートを、ある時母が読み返してみた。それはほとんど会話が出来なくなっていた父が自分の思いをノートに書き留めていたものであった。それは、それまで一度も言ったことがない母への感謝の言葉〝今までありがとう〟から始まり、自分の葬儀のやり方などが書かれていた。きっと自分の最後の時間があまりないと悟っていたのであろう。死ぬ三日前のノートに「理恵（私）の事がすごく心配……でもまあなんとかなるだろう」と父らしい言葉で私を案じる気持ちが書かれてあった。体調を崩して見舞いにも行かなかった娘の私を普段口に出す事はなかったが、こんなにも心配してくれていたのだ。私はこの時、生まれて初めて父のとても深く強い愛情を肌で感じる事ができた。生きていた時は素直に気持ちを表わすことがなかった父、親子らしい会話なんて一度も交わしたことがなかった。私達を養うために暑い夏も寒い冬の日も毎日必死に働いていたお父さん。生きている間に本当の父の気持ちを私は理解することができなかった。「一度でいいからお父さんに甘えてみたかったよ」。死が迫ったギリギリまで娘の事を案じてくれていたのだろうと、涙が溢れて止まらなかった。

今、私はすっかり元気をとり戻し、前に向かって進んでいる。不思議なことにある時、今まで私の回りを覆っていたどんよりとした重い霧が突然パッと明るく開けたのだ。父が

きっと私の〝生きる力〟をとり戻してくれたのだろう。本当によかった。毎日を自信を持って生きて行けることに感謝している。すべてのものに、ありがとう……。

そして今日も仏壇の父に語りかける。

「お父さんありがとう。私頑張るよ。だから見守っててね」